RA協議会第8回年次大会
［F-3］最近よく聞く「総合知」って何？ー人文・社会科学の視点からー

人文・社会科学系研究リソースの可視化と総合知

京都大学

2022年8月31日

京都大学 学術研究支援室（KURA）
人社系グループ
稲石　奈津子

本日の流れ

1. 今までの異分野融合・学際研究に関する背景と「総合知」
2. 人文・社会学系研究の成果発信・可視化
3. 社会課題解決に向けた人文・社会科学系研究リソースの可視化

「総合知」勉強会での意見や質問から

・「総合知」の定義とは何か

・従来もあった超学際・トランスディシプリナリー研究（TDR）や、JSTのRISTEXで進められてきた学際・社会課題解決型・社会実装型研究とは何が違うのか

＜中間取りまとめ＞（案）（令和4年2月10日・内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局）
はじめに（中間とりまとめの位置づけ）

・令和３年４月から施行された科学技術・イノベーション基本法では、従来、対象としていなかった人文・社会科学のみに係るものが法の対象とされ、あわせて、**あらゆる分野の知見を総合的に活用して社会課題に対応していくという方針**が示された。これは、科学技術・イノベーション政策が、**人文・社会科学と自然科学を含むあらゆる「知」の融合による「総合知」により、人間や社会の総合的理解と課題解決に資する**政策となることの必要性とその方向性を指したものである。

　我が国は、気候変動などの地球規模課題への対応や、レジリエントで安全・安心な社会の構築などの問題、少子高齢化問題、都市の過密と地方の過疎の問題、食料などの資源問題といった**多岐にわたる社会課題を抱えており、科学技術・イノベーション政策に対する社会や国民から高い期待が寄せられている**。

　こうした課題に対応するため、自然科学のみならず人文 ・社会科学も含めた多様な「知」の創造と、「総合知」による現存の社会全体の再設計、さらには、これらを担う人材育成が避けては通れない状況となっている。

「総合知」をどう捉えるか

・なぜ「総合知」ということが言われているのか、
その背景と目的、必要性

・解決すべきテーマは何かという点の重要性

・TDRやRISTEX
政策的な再定義という面

・従来の学際・異分野融合研究との違い
社会課題解決という目的
アカデミア以外の多様なステークホルダーとの協働

「総合知」以前の議論
ー異分野融合・学際研究について

第6回RA協議会年次体会セッション
F-1 プロジェクトのマネージメント
「異分野融合研究・プロジェクトにおけるURAの役割について考える」
人社系の関わる事例紹介と今後の共創研究に向けて（2020年9月18日）

（科学技術と社会の調和に向けた自然科学との連携・協働とその課題）

これまでも自然科学との連携・協働は複数の場において進められているが、そうした実践の場面においては、経験的にいくつかの困難が見出されている。

例えば、連携や協働という**本来手段であるはずの事柄それ自体が目的化してしまう**ことや、連携・協働の組み合わせにより**比較的解決しやすい問題に傾いて本来意図する研究のスケール感が失われること**があること、また、実際に問題が生じる場となる**自然科学による問題設定が主導する形となって人文学・社会科学の研究者が自身の専門性との関連においてインセンティブを持ちにくいこと**、などが挙げられる。

FROM：科学技術・学術審議会　学術分科会
人文・社会科学振興の在り方に関するワーキンググループ
「人文学・社会科学が先導する未来社会の共創に向けて」
（審議のまとめ）（平成30年12月14日）

そもそも本来の目的や
解決すべき課題は何か？

人社系研究から何がアプローチできるのか

Phase1

学際・文理融合に限らず共同の幅を広げて考えてみる
（学術的成果のみに留まらないあり方）
産官学連携、地域連携、社会連携

共創研究

Phase2

現在や未来の社会的課題や
追求すべきテーマは何か
それに応じることのできる人社系研究は何か
探究・提示
（学際研究であること自体は目的ではない）

Phase3

チーム形成や
研究環境、
プラットフォーム作りを考える

人文・社会科学系研究を巡る課題解決に向けた、研究環境の整備
3つのプロジェクト＋1

1 外部資金獲得プロジェクト

- 人社系大型外部資金への申請支援
- 民間助成財団 学内説明会の開催
- 公募型資金情報サイト「鎗」の利用促進
- チーム形成支援

資源整備・成果発信プロジェクト 2

- 京大新刊情報ポータルサイトの開設・運営
- 海外出版への支援
- 人社系海外出版書籍のオープンアクセス（OA）化
- 人社系研究紹介冊子の作成
- 学内資源プラットフォームの構築支援

3 研究力の可視化プロジェクト

- 研究評価に関する調査・検討
- 研究評価に関するフォーラム等の開催

他大学・機関との連携、業務成果発信 4

- 人文・社会科学系研究推進フォーラムの企画・開催
- JINSHA情報共有会の企画・開催
- RA協議会年次大会セッション企画

京大新刊情報ポータルサイト

https://pubs.research.kyoto-u.ac.jp

2021年度実績

2021年度の**新刊の**掲載件数
１７９冊
（昨年度１８４ 冊）

英語化タイトル掲載件数累計
１６０冊
（昨年度 １３６冊）

総掲載件数
１,４５１冊
（昨年度 １,０８７ 冊
（2022/3/2時点）
掲載**純増件数**は**364冊**）

ポータルサイトアクセス数

2019年度	
閲覧数	16,473
閲覧者数	13,466
2020年度	
閲覧数	20,530
閲覧者数	17,905
2021年度	
閲覧数	19,705
閲覧者数	16,895

（2022/3/1時点）

オープンアクセス化した
図書にタグ付け

人社系海外出版書籍のオープンアクセス（OA）化事業

C-2 新たな成果公開の方法に挑戦したり、オープンサイエンスを実践したい！

2022/03/29

Like 18 Tweet

海外出版書籍オープンアクセス化 インタビューシリーズ（3）

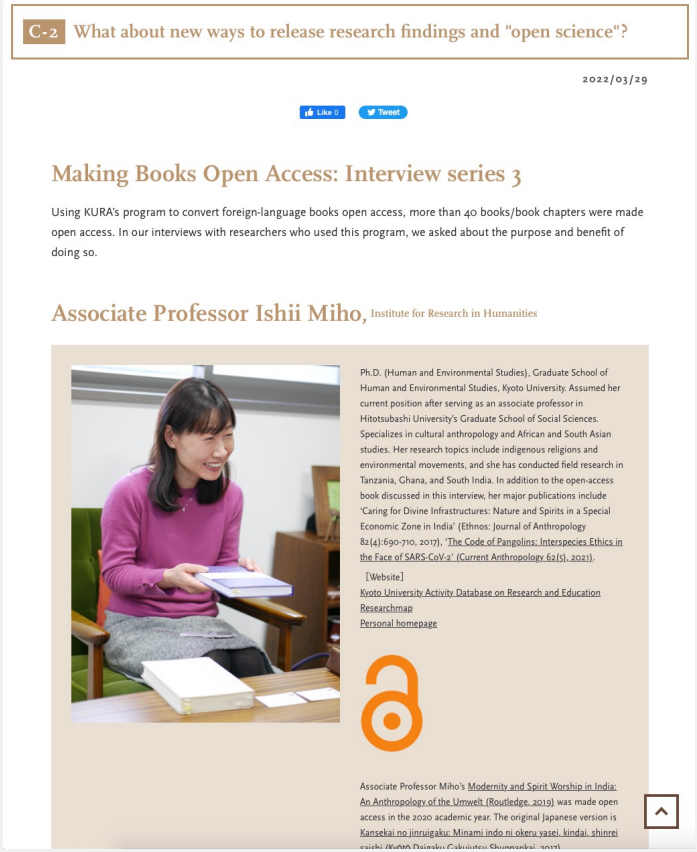
海外で出版した外国語の書籍を、更に多くの人に読んでもらいたい―KURAで実施した海外出版書籍のオープンアクセス（OA）化事業を通じて、40を越える本や章がOA化されました。プログラムを利用して書籍をOA化した研究者に、OA化の目的やメリットについてお伺いしました。

人文科学研究所 石井美保准教授

京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。博士（人間・環境学）。一橋大学大学院社会学研究科准教授を経て現職。専門分野は文化人類学、アフリカ・南アジア研究。在来の宗教や環境運動などを研究テーマとし、タンザニア、ガーナ、南インドでフィールド調査を行う。主な著書は今回のOA化対象書籍以外に、『めぐりながれるものの人類学』（青土社）、『文化人類学の思考法』（共編著、世界思想社）など。

［ウェブサイト］
京都大学教育研究活動データベース
Researchmap
個人ホームページ

Routledge社から出版された単著、Modernity and Spirit Worship in India: An Anthropology of the Umwelt (2019年)を2020年度にオープンアクセス化。元となった日本語版の書籍は、『現世界の人類学――南インドにおける野生・近代・神霊祭祀』（京都大学学術出版会・2017年）。



C-2 What about new ways to release research findings and "open science"?

2022/03/29

Like 0 Tweet

Making Books Open Access: Interview series 3

Using KURA's program to convert foreign-language books open access, more than 40 books/book chapters were made open access. In our interviews with researchers who used this program, we asked about the purpose and benefit of doing so.

Associate Professor Ishii Miho, Institute for Research in Humanities

Ph.D. (Human and Environmental Studies), Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University. Assumed her current position after serving as an associate professor in Hitotsubashi University's Graduate School of Social Sciences. Specializes in cultural anthropology and African and South Asian studies. Her research topics include indigenous religions and environmental movements, and she has conducted field research in Tanzania, Ghana, and South India. In addition to the open-access book discussed in this interview, her major publications include 'Caring for Divine Infrastructures: Nature and Spirits in a Special Economic Zone in India' (Ethnos: Journal of Anthropology 82(4):690-710, 2017), 'The Code of Pangolins: Interspecies Ethics in the Face of SARS-CoV-2' (Current Anthropology 62(5), 2021).

［Website］
Kyoto University Activity Database on Research and Education
Researchmap
Personal homepage

Associate Professor Miho's Modernity and Spirit Worship in India: An Anthropology of the Umwelt (Routledge, 2019) was made open access in the 2020 academic year. The original Japanese version is Kansekai no jinruigaku: Minami indo ni okeru yasei, kindai, shinrei saishi (現世界の人類学 南インドにおける野生・近代・神霊祭祀, 2017).

OA化対象書籍・著者インタビュー公開
「研究者の歩きかた」サイトに
インタビュー4本掲載（日・英）

（1）教育学研究科 Emmanuel Manalo教授
日本語 https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/cat-c/c2/1617/
英語 https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/en/cat-c/c2/1617/
（2）文学研究科 横地優子教授
日本語 https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/cat-c/c2/1556/
英語 https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/en/cat-c/c2/1556/
（3）人文科学研究所 石井美保j准教授
日本語 https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/cat-c/c2/1622/
英語 https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/en/cat-c/c2/1622/
（4）経営管理大学院 Spring H. Han准教授
日本語 https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/cat-c/c2/1586/
英語 https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/en/cat-c/c2/1586/

OA化のメリット　定性的に見たOA化の成果

- **SDGs的な観点**（学術資源格差の是正）
- **社会的インパクト**（引用ではなく社会的貢献、教師により実際に教育現場で使用されるなど）
- **教育への貢献**（学生が無償で入手できる）
- **英語化、国際的成果発信への後押し**（英語化や国際発信への意欲増）
- **海外の潮流との同期**（ヨーロッパ圏での助成事業のOA化義務付け）

人社系研究からのアクション

・既に人社系研究は社会課題解決に向けたテーマに
取り組んでいるということの可視化

提案する人文・社会科学

©京都大学人社未来形発信ユニット

人社系総合ハブサイト Rethinking the future　未来を再考する人社系

京都大学「人と社会の未来研究院」では、**人文・社会科学系分野を中心とした社会連携、産官学連携、異分野共同研究、そして社会課題解決に向けた研究の推進を目的**とした、人社系総合ハブサイト Rethinking the future「未来を再考する人社系」を公開しました。

このウェブサイトは、「ポストコロナ」「ウェルビーイング」など、**これからの未来を考えていくための重要キーワードを切り口に、京都大学の研究リソースを探索**できるようになっています。気軽にアクセスできるインタビュー記事や講義動画から最新の研究成果まで、今日的な課題の解決につながる人社系研究の知見をぜひここから見つけてください。

https://jinsha.ifohs.kyoto-u.ac.jp

取り組み体制

取組体制

京都大学が指定国立大学構想の下に立ち上げた
人社未来形発信ユニットが作成主体
（2022年3月末終了）
学術研究支援室（KURA）がユニットの委託を受けて作成
（2020年度～2021年度）
→**人と社会の未来研究院が引き継ぎ運営**
（2022年4月より）

具体的に作成する段階では**３者でコンセプトを検討**
人社未来形発信ユニット（出口教授、大西特定准教授）
＋
学術研究支援室（KURA）（人社系・稲石、広報・鮎川）
＋
ほとんど０円大学（花岡氏ほか）

活動費の財源

指定国立大学法人
国立大学改革強化推進補助金
（国立大学経営改革促進事業）
人文・社会科学の未来形の発信

作成体制

コンテンツ収集と解説文の作成は
学術研究支援室（KURA）
人社系プログラムメンバーURA
（稲石、藤川、藤田、天野、佐々木（小泉、鈴木））

作成の目的とターゲット

Webサイト作成の目的

京大人社研究者とターゲットとの共同研究・連携を増やす

Webサイトのターゲット

① 企業・産業界
② 理系研究者
③ 中央省庁・行政関係者

Webサイトの役割・目標

プロアクティブに社会へ連携を訴えることのできるサイト

人社系の知の共同研究を推進するために、
広く社会に対して
人文・社会科学の意義や社会的役割への理解を訴えていく
そのために

- 人社系の研究成果を発信
- 異分野との共同研究や社会との連携、社会への研究成果の活用・展開事例を紹介

→ サイトを見てもらいターゲットからコンタクトしてもらう

キーワードに沿って既存の情報をリンクさせたハブサイト

京大人社系研究リソースの産連・学際・社会課題視点での再構築
大学視点でカテゴライズされてきた京大人社の情報を、
産業界や理系研究者、行政が興味をもつカテゴリ、及び
京大人社の独自性が伝わるカテゴリで、
それぞれ**整理**し直して表現する
（それぞれのカテゴリでソートして関連情報のみ集約して見せる）

ウェブサイトの構成

産業界アンケート ➡ 問題意識、キーワードの導出

専門分野の教員へのヒアリング・相談 ➡

産連・学際・社会課題キーワード群

未来を考えるキーワード

京大人社特徴的キーワード群

京大人社を知るキーワード

掲載キーワード　8＋2＝10

Link

ウェブサイトの構成

キーワード別に①ー④を構成

① **スペシャルコンテンツ**
（学内外のインタビュー・記事・論考・講義動画など）

② **研究成果**
（書籍中心）

③ **研究拠点・プロジェクト**
（京大の部局・センター・研究プロジェクト）

①ー③
解説文＋既存のコンテンツへのリンク
（学内コンテンツの場合は転載）

④ **研究者**

④ 京都大学教育研究活動データベースの各研究者情報にリンク

作成に向けた調査

産業界のニーズ調査

サイト作成に向けたサイトの機能やコンテンツの検討にあたり、**産業界や社会のニーズを把握するためのアンケート調査の必要性**

京大OBOGの企業のトップ層で形成された
鼎会会員にアンケートを実施
＊2020年9月に開催された鼎会総会時の対談企画にも結果を活用

京大人社系教員へのヒアリング

サイトのあり方や構成、キーワードの設定など、**専門的な見地からのアドバイス**も含めてご意見を募る

選択したキーワードに関する解説テキスト「**京大人社の知見**」に関してお伺い

初動時キーワード

8＋2＝10

・キーワード毎に担当を決めてコンテンツを収集
・全てのコンテンツに解説文を作成

未来を考えるキーワード群

・ポストコロナ
・AI /シンギュラリティ
・ウェルビーイング
・ELSI
・SDGs
・人口減少/高齢社会
・環境問題
・ジェンダー

京大人社を知るキーワード群

・京都学派
・アジア人文学

訴えたいこと

人社系研究には社会課題解決に向けて、既にこれだけの研究・活動があることの可視化・発信

既にあるコンテンツ・価値を特定の切り口で再構築し見（魅）せる

「総合知」という言葉が出てくる前に作成を始めたウェブサイトだが、「総合知」の創出に向けて有用と思われるコンセプト

「総合知」の創出に向けた共同研究・協働を誘発

必ずしも即戦力となる実践研究は期待しない（とくに京大には）。むしろ、**地球・人類の発展や進化の基層を成してきた哲学・思想・歴史の深堀り・総括を期待したい。超長期視点からの経営ビジョン構築には、それが必須と考える。**　（鼎会アンケートより抜粋）

お勧めポイント

京大人社の視点

未来を考えるキーワード

AI／シンギュラリティ

京大人社の視点

シンギュラリティが到来し、AIが人間を超える知能を備えるようになるという予測に対して、人々は期待と危機感をないまぜにした感情を抱いています。たとえばAIのほうが知的に優れているだけでなく、より思いやりがあるなど道徳的にもより完全な存在となる可能性について、あなたはどうお考えでしょうか。人間がAIに仕えたり、AIによって仕事が奪われたりという状況を想像して恐れを抱くのは、実は新しいことではありません。暮らしや社会を便利にするために生み出した技術や制度が人間を支配し人間性を失わせるという人間疎外の問題は、すでに19世紀から指摘されていました。シンギュラリティを目前にした今こそ、より根源的に、人間の本質とは何か、何のための技術革新なのかを問いなおす好機と言えます。

未来を考えるキーワード

ポストコロナ

京大人社の視点

コロナ禍を経て、社会が大きく変わっていく可能性が指摘されています。たとえば、本格的なデジタル社会の到来。リモートでも十分に仕事がこなせ、移動にかかる無駄な時間が減る一方で、対面でなければ得られない人とのつながりが失われることが懸念されています。効率化や利益の増大を求めてグローバリゼーションを推し進めた世界は、パンデミックを前に脆さを露呈しました。効率化に回収されない、新たな価値とは何か。それを目に見える形で提示し、人々と共有するにはどうすればよいのか。議論が始まっています。

未来を考えるキーワード

ジェンダー

京大人社の視点

女性の活用が政策として掲げられる今日、未来の社会のあり方をデザインする鍵として、ジェンダーが重要なイシューとなっています。フェミニズム運動や社会政策、家族観や性的役割分担など、ジェンダー研究は当初女性学として発達を遂げてきましたが、やがて男性学やLGBT・クィアなどセクシュアリティに関する理論も含みながら、その多様性や流動的なあり方が認識されるようになってきました。歴史や文化的相対性を背景に、ジェンダーの捉え方はどのように変容していくのか。グローバル化の中での新しい社会秩序形成、社会の変革の鍵ともなるこの課題を、我々は深く考えていく必要があります。

京大人社系研究の知の厚みと深みが感じられるサイトに

学術知を社会へ発信・還元

総合知とオープンサイエンス、そして社会的インパクト

人社系海外出版書籍のオープンアクセス（OA）化事業より

C-2 新たな成果公開の方法に挑戦したり、オープンサイエンスを実践したい！

2022/03/29

Like 0 Tweet

海外出版書籍オープンアクセス化 インタビューシリーズ（1）

海外で出版した外国語の書籍を、更に多くの人に読んでもらいたい—KURAで実施した海外出版書籍のオープンアクセス（OA）化事業を通じて、40を越える本や章がOA化されました。プログラムを利用して書籍をOA化した研究者に、OA化の目的やメリットについてお伺いしました。

教育学研究科 エマニュエル・マナロ教授

ニュージーランド・マッセー大学（ニュージーランド）で博士号取得（心理学）。早稲田大学理工学術院英語教育センター教授を経て現職。専門分野は教育心理学、認知心理学。効果的な学習・教授方略、批判的思考・メタ認知等の思考スキル発達、21世紀型コンピテンシーの育成等を研究テーマとする。今回のOA化対象書籍以外の主な編著書として『Promoting Spontaneous Use of Learning and Reasoning Strategies』（Routledge、2017、共編著）がある。

［ウェブサイト］
京都大学教育研究活動データベース
Researchmap
ホームページ

Routledge社から出版された編著「Deeper Learning, Dialogic Learning, and Critical Thinking」を2020年度にオープンアクセス化。アマゾンのキンドル版（無料）でもアクセスが可能となっている。

海外出版書籍オープンアクセス化 インタビューシリーズ（4）

海外で出版した外国語の書籍を、更に多くの人に読んでもらいたい—KURAで実施した海外出版書籍のオープンアクセス（OA）化事業を通じて、40を越える本や章がOA化されました。プログラムを利用して書籍をOA化した研究者に、OA化の目的やメリットについてお伺いしました。

経営管理研究部 Spring H. Han准教授

京畿大学校 観光専門大学院修了(Ph.D.in Tourism)。ミシガン州立大学Postdoctoral fellowshipを経て現職。専門分野はサービスマーケティング、ホスピタリティマネジメント。最近の関心は、センサリーマーケティング、感動とサービス体験、ヘルスケアサービスマネジメントなど。主要論文はCornell Hospitality QuarterlyやService Scienceなど著名な学術誌にも採録。

［ウェブサイト］
京都大学教育研究活動データベース
Researchmap
経営管理研究部ホームページ

ハン准教授の編著*The Future of Service Post-COVID-19 Pandemic, Volume 1*（Springer社刊、Jungwoo Leeとの共編著）は、2020年度、出版と同時にオープンアクセス化されました。

社会的インパクト　引用ではなく社会的貢献

- 教師により実際に教育現場で使用される
- COVID-19への素早い反応
- 研究者は引用数を上げるために研究しているのではないというご発言